「ミュアヘッド・フィールズの過去、現在、未来（その 11)」

2024 年 2 月

ブリック＆ウッドクラブ理事会
（文責：中島健一郎）

１．新たな試み

ブリック＆ウッドクラブ（ＢＷＣ）がどのように構想されたか、実現するまでにどのようなドラマティックな展開があったのか、そして現在に至る発展の歴史を書いて来た。またゴルフ場と住宅地の一体化という、ミュアヘッド氏の構想を生かす土太郎村の理念と開発の経過、暮らしぶりを描いてきた。世の中の多くの方々に「日本には珍しいユニークなミュアヘッド・フィールズ（ＭＦ）」と評価されていることを関係者は今誇りに思っている。

しかしこのＢＷＣと土太郎村の開発、ミュアヘッド・フィールズ　コミュニティ（ＭＦＣ）の完成に向けて大変な苦難を乗り越え、驚異的な突破力で推進してきた坂征郎さんはさらに大きな構想を描いていた。今度は、自分の資金を投入してＢＷＣを出た県道の反対側の山林原野に勝浦の古民家を移築し始めたのだ。持ち主に「誰も住んでいらっしゃらないなら譲ってください。」と 10 年ほど前に頼み手に入れた古民家。一緒に見に行った中島は「もらったままになっていたので、どうするのかな？」と怪訝に思っていたが、移築が始まって納得した。もちろん大黒柱、煤けて真っ黒に輝く巨大な梁や礎石、それに板戸、欄間など使えるものが運ばれ、坂さんの図面をもとに再構成された。2022 年 3 月にＭＦＣの３代目理事長高橋敏男さんら 10 数人が招かれ、高滝神社の神主が棟上げの神事を司った。想像以上に大きな古民家が移築されていること皆は驚いた。庇の部分は古民家の雰囲気を出すため藁屋根にした。後に坂さんは入手が難しくなっていた茅や葦などの材料を走り回って集めることになり、ダビッドという、フランスでは家具の職人で日本に大工仕事を学びに来ている男が茅葺屋根を葺いたためフランス風の藁屋根ができたのだった。棟上げ以降、古民家エリ

アについて坂さんの構想が次第に語られたが、これまたユニークで壮大なものだった。地主と交渉して古民家を中心とする山野を買い集めた坂さんは、古民家の下を流れる小川に立派な橋を作った。この橋を作ることを行政に認めてもらうには何度も市役所に足を運び相当の時間がかかったし、どんな豪雨でも流されない橋梁にするため見えない地中にも何十本という鋼管杭を打設して費用も予定の倍以上も要した。

橋を越えたところに特色のある飲食店を招くために市原の名工である石井半佐久さんが建築した根本保さんという方の家（2 階建て）を移築した。2 階には大多喜町の発酵料理の店蔵精（くらしょう）を招いた。店主夫妻はニューヨークの「なだ万」で修業した人。発酵料理は健康食で、外国からも遠路はるばる食べにくるとのこと。店内には雰囲気の継続性を考え、大多喜時代のカウンターなどが運ばれ 2024 年春にオープンする。大多喜町の行政トップが「わが町の名物店が移転してしまう」とショックを受けたほどの店だ。1 階には千葉市内の美味しいフレンチが食べられるビストロを誘致すべく交渉中だ。

さらにレストラン建物の先にはトレーラーハウスが 15 台ほど置かれるゾーンがある。子ども 3 人の 5 人家族で騒いでも気兼ねしなくてすむし、ワンちゃんもＯＫというトレーラーハウスは人気上昇中。既に鴨川でトレーラーハウスを貸し出している会社があるが、海が見晴らせることもあり人気が高まっている。その会社もペットが泊まれるのを売りにしているが、「ＢＷＣは犬を連れてゴルフができるし、愛犬家のゴルファーは殺到するだろう。」と太鼓判を押している。

坂さんは何でも自分で作ってしまう人なので、既製品を買わず、シャーシーから上物まで製作している。このところの材料費の値上がりにはまいっているが、それでも売り出す前に４台の買い手が決まった。オーナーは自分が好きな時に使えるが貸して収益をあげることもできる。

２．宿泊の充実と地元産品の販売

ＢＷＣのプレーヤーの多くは土日のアクアラインの渋滞に困っている。房総半島が東京や横浜の近場の行楽地として賑わうようになり、朝は下り、夕方は上りが混雑する。プレーを終えて帰宅しようとすると、午後３時半くらいから午後８時くらいまではノロノロ運転を強いられ、普段なら東京・銀座まで１時間くらいで帰れるところ土日は２時間以上もかかる。しかし金曜日の夜に来て宿泊し、プレーしてもう１泊すれば朝の上りアクアラインはすいすい走れる。このような事情もあって、ＢＷＣのメンバー・ゲストの宿泊需要は特に土日祝日の前泊を中心に高いものがある。しかしながら、現在はＭＦＣの住宅オーナーによる民泊が中心でこれを賄いきれていない。この古民家エリアには、宿泊可能な建物を建設してこうした需要を賄うとともに、公道に面している利点を生かしてＢＷＣメンバー・ゲスト以外の一般のお客様を呼び込むことができれば、ＢＷＣの収益上も好ましい。

このため株式会社高滝リンクス倶楽部（高滝）は、2023 年 11 月 26 日の株主総会で定款にホテル業・旅館業を追加する決議を行った。宿泊施設は主にツインルーム５室でスタートするが、トレーラーハウスが民泊に供されるようになれば、ＢＷＣに来る方々は近場の宿泊施設を探し回る必要がなくなる。高滝の取締役を長く務めている草深多計志さんは、三井住友銀行勤務時代に、あの有名なカリフォルニア州のペブルビーチの代表をしていたことがある。ペブルビーチ・ゴルフ・リンクスは宿泊客がプレーするゴルフ場でもあったから、宿泊施設の重要性は良く知っていた。このためこのエリアでのホテル運営には賛成だった。

宿泊用建物は古民家に向かって左側に建てたが、１階にはストレッチスペースやトレーニング用の器具などが既に置かれている。古民家の前面に作られた細長い平屋は区切られて事務室と産直品売り場などになる。地元の農家の無農薬有機野菜やその他地元のものを多くの人に提供するいわばＭＦ版の道の駅である。

坂さんは高滝湖畔に約 400 坪の専用農園を持っているが、レイライン農園と名付けた畑で中島が分

かったことは「農業がいかに大変か。」だった。まず畑に適した土壌作りをしなければならない。石ころを拾い、竹炭を撒いて耕運機でうなる。次に数カ月寝かして発酵を終えた馬糞を撒いてうなる。そのあと米ぬかを撒く。インドからの技能実習生（農業）２人やフィリピンの若者も作業してくれるが、取りきれていなかった大きな石で耕運機が壊れてしまい、修理しなければならないようなことが起こる。

試しに植えた落花生やサツマイモは、それぞれ 2 坪くらいの面積なのに 12 月初めにたくさん収穫できた。殻を外したピーナツはフライパンで１０分ほど弱火にして炒ると香ばしくておいしい。サツマイモは冷暗所で１カ月ほど寝かせると甘みがぐんと増す。暖炉のダッチオーブンで蒸かすと、これまたおいしい。中島はＭＦＣの 10 軒くらいに「食べてみて。」と配ったり、お客さんに出したりして喜ばれた。

落花生を収穫した跡にはスナップエンドウの苗を植えた。保険会社の幹部なのに農業や釣り、野鳥観察や蕎麦打ちのベテランの友人、佐久間義明さんが指導してくれるので東京っ子だった中島は農業の大変さと喜びを学んでいる。例えば、スナップエンドウの苗の周りには藁を敷く。霜にやられない対策だ。その藁が風で飛ばされないように紐を張って抑えるなど手間暇をかける。育ってきたらツルが絡めるように南向きに網を張る。そんな努力を重ねると 2024 年 3 月には収穫を始められるが、採れたてのスナップエンドウはそのままかじっても、シャキシャキ甘くてびっくりするほどうまい。

上総一宮の玉前神社の鳥居に春分の日に太平洋から昇った朝日が差し込む。その光の線（レイライン）を真っ直ぐ西に引っ張ると高滝神社、ＢＷＣ、ＭＦＣを経て神奈川県の寒川神社、そして富士山、伊吹山、琵琶湖の竹生島、京都の元伊勢、さらに大山を貫いて出雲大社に至る。「ＭＦのＢＷＣやＭＦＣはすごく縁起の良いレイライン上に存在するのですよ。」と中島は言われたことがあった。それで畑の名前をレイライン農園としたのだった。

地元産品の売り場では、野菜などを中心に販売する計画だが、「使い切りの CRAFT GRILL 食材付き」を販売したらどうかとも考えている。これはＭＦＣに薪ストーブを売り込みに来ていた会社の営業課長が「こんな使い捨てのバーベキューのグリルがありますよ。」とデンマークで開発された CRAFT　GRILL を紹介してくれたもので、段ボールを組み立て、竹炭と竹串をセットして組み立てる。断熱材の火山石が、燃えている竹炭から段ボールに火が移らないようにする仕組みだ。全て天然素材だから使用後には土に埋めれば良い。火山石は土壌改良剤になるし、すべてがエコロジカルだ。

通常のバーベキューの器具は中島も買いそろえたが 5 回くらい使っただけでしまい込まれている。炭と着火剤を買ったが、火を起こすのがかなりの手間だし、終わったら綺麗に掃除して箱にしまわなければならない。保管スペースも必要だ。しかしこの使い捨て CRAFT GRILL は着火剤を含ませた竹炭に簡単に火がつく。60 分間、調理温度がキープされ肉でも魚でも野菜でも焼ける。炭火なので炎が立たないから竹串は燃えない。試してみたら組み立てに多少、手こずったが、慣れれば簡単だ。4 人くらいでバーベキューをするなら十分で、人数が増えたら２台にすれば良い。しかも炭火焼なのでこんがり焼けて美味しい。値段も１台千数百円と手ごろである。肉や魚を味付けし真空パックにする他、ジャガイモ、ニンジン、カボチャなどは湯がいてパックし、チルドにして置き、食材付きで提供したらどうだろう。

さて使い捨てバーベキューセットについて、長々と紹介したが、建物・施設といったハードはもちろん大切だが、どのような運営にするか、何を売りにするかのソフトはかなり大事だ。古民家は堂々とした風情のある建物として見る人を感動させるが、どのように利用するかのソフトがあってこそ生かされる。「ＢＷＣはメンバーやゲストのゴルフプレーの施設。ＭＦＣはゲーテッドコミュニティーとして家を建てた人が集まって暮らしを楽しんでいる。だから外部の人々にとっては閉鎖的になりがちだ。水の流れがないと池がよどむように閉鎖社会は新鮮な雰囲気が失われかねない。僕はＭＦが将来も魅力的であるためには外の世界にオープンでなければならないと思う。地元の人々も日本全国からの行楽客も外国人も集まれるように構想したのは多様な文化の交流を図り閉鎖性を打ち破るためだ。」と坂さんは言う。そして「私財をありったけつぎ込んだ。予想以上に費用が掛かってしまった」と苦笑いした。現時点では、この古民家エリアをＭＦの一つのコンテンツとして位置づけ、ミュアヘッド・フィールズ　リトリート（ＭＦＲ、仮称）とし、サブネームを Ichihara Southend Landmark とする予定である。

３．これから

1969 年 1 月に東大紛争で機動隊と過激な学生らのセクトが安田講堂などで激しく争った。本郷通りに埋め込まれた 30 センチ角の平板を抵抗する学生らがはがして投石しないように、警察は工事会社に依頼して撤去した。それを近くの追分旅館の息子、坂さん（当時、サラリーマン 2 年目）は見ていた。古民家の基礎工事をしている際に、その平板が大量に出てきた。工事会社はなんと平板をＢＷＣの前の山野に埋めていたのだった。坂さんは「そうしたところにＭＦＲの工事を進めてきたのは何か因縁を感じる。」と言う。

中島は毎日新聞に入社し長野支局で駆け出しの記者をしていたが、休みを取って安田講堂の攻防を見に行った。卒業せずに全共闘や民青として動いていた連中や、紛争収拾に立ち上がったノンポリの同級生に会うためでもあった。理学部 2 号館を民青が拠点にしていたので中島は泊まり込んだ。ガスバーナーを燃やして暖をとり床に寝たが、足の匂いが強烈に臭かったことを覚えている。ノンポリ学生は明治神宮外苑の秩父宮ラクビー場に結集した。町村信孝君（後に衆院議長、故人）や河野博文君（資源エネルギー庁長官など歴任、故人）らが必死に「東大紛争収拾」を呼びかけていた。坂さんも中島も、東大紛争に対して多感な青年として感じるものが多かった。その記憶を蘇らせるように東大紛争の時にはがされた平板が発見された。坂さんはその平板を大事に集めて古民家周辺の歩径路に使っている。

2014 年 11 月 1 日に中島は「加茂地区創生への素案」（加茂地区は市原市の過疎地域でＭＦのある地域で町村合併前は加茂村だった）を市原市議会の竹内直子議長（当時）、小出譲治前議長（現市長）、星野伊久雄議員（元議長）に提案した。上記 3 人と加茂地区の遊休施設（廃校になった小学校 5 つなど）を視察し、有効利用を相談されたので素案として考え方を報告した。

素案の要点を書く。

１、 意識改革（我々は無意識に現状維持にこだわっている。「今の場所で今のまま」という無意識がこわい。猛スピードで高齢化が進み、少子化により、人口が減少するが、現状維持では衰退の一途だ）

２、 多様性への理解（日本は同質性、均質性が強固に求められる国である。しかし若者、女性、外国人など多様な人を受け入れなければ変革は起こせない）

３、 クリエイティブ人材の時代と認識（社畜的な生き方でなく、自分で段取りし、仕事と余暇の区別のない自己表現に重きを置くライフスタイルが生まれている。個性を大切に、他人の差異を尊重する開放的な生き方をする人の方が生産性は高い）

４、 市民が中心になる（国や県や自治体など官の主導でなく、市民が自ら手をあげ多様な人々を巻き込み、変革のチームを作ろう。上から知恵、予算、人材が降ってくるという考えは捨てよ）

５、 外国人の受け入れ（自分達とは歴史も文化も違う外国人を受け入れることは新たな発見につながる）

６、　地域の資源の発見・評価・活用（何か仕事が生み出せますか、と問い続けること。それが地方創生の肝だ）

そして素案では「起業＆ビジネスセンター」「ケンネル（犬の楽園）」「バイオマス道の駅」「加茂健康道場」「グリーンスクール」「お試し田舎暮らしの家」などの構想を提案した。9年ほど前の素案は現在でも通用すると思う。

さて2024年元旦に毎日新聞プレミアムメールで配信されたが、霊長類学者でゴリラ研究の第一人者山極寿一さん＝71 歳（総合地球環境学研究所長）は「平和のヒントは狩猟採集時代」というインタビュー記事で田舎への移住を勧めている。人類は進化史の 99%以上を原野で暮らし、自然の変化を五感で素早く感じ取って、その恵みを利用してきたのだと言う。戦争や感染症、気候変動がグローバルに影響を及ぼす時代で日本はかつてないスピードで人口減少が進んでいるが山極さんは「日本にとってはチャンスだ。」と語る。

どうしてチャンスなのか。「現在、地球の人口の半分以上が都市に暮らしていて、日本も東京一極集中が著しい。しかし、もともと人が住むには適さない湿地や海を埋め立てて造られており、自然物を排除して人工的なインフラによって整備されている。下水道や電力のシステムが至る所に配備され、維持するコストが高い。住居は密閉されているので冷暖房の設備が必要で、巨大なビルや工場には膨大な電力を供給しなければならない。」「一方、自然が豊かな地方は森林や川の流れなど自然の力を利用できるので暮らしにそれほどお金がかからない。ビルの谷間を歩くより自然の中を散策するほうがいろんな命に出会える。地方には仕事がないし遊ぶ場所も乏しいので、若者が出ていくと人々は言う。しかし、都市に本当に胸を躍らすような仕事があるのだろうか。毎日決まりきった仕事をしに満員電車に乗って会社に通い、みんな同じような住宅に寝起きし、わずかな休暇を駆け足で過ごす。こんなことを続けていたら結婚も子どもを作ることもできなくなる。事実、少子化が最も著しいのが東京である。都市の仕事の大部分はやがて AI（人口知能）に置き換えられてなくなる。失業すれば、さらに低賃金の生きがいのかんじられない仕事しかなくなる。」

山極さんのインタビューは「移住者を受け入れる知恵」「物の価値をマーケットから取り戻す」「食糧自給率を高めるには」などと進み「新たなジャポニズムの到来」を日本の将来像として示している。

このインタビューを読んで中島は意を強くした。例えば食糧自給率はカロリーベースで３８％だ。しかし牛や豚、鶏などのエサや肥料を輸入に頼っていることを考慮すると実質の食糧自給率はカロリーベースで10数%でしかないという。ロシアとウクライナの戦争で小麦の値段が高騰し、トウモロコシなども輸入は困難になっている。日本は輸入代金を稼ぐため自動車、電機製品などを輸出していたが原油の値上がりもあり、国際情勢の変動で先行きは予想しがたい。世界人口の増加で食糧の奪い合いの時代が来るともいう。地方への移住者を増やし、耕作放棄地、休耕田をマイ畑としてみんなが農業に従事したり、自然エネルギーの分散電源で電気を賄えば食糧自給率も上がり、原油・ガスの輸入も減らせるのではないか。

一方、私たちは豊かさと便利さを手に入れすっかり慣れている。食べるならおいしいも

のを食べたいし、毎日風呂に入る清潔な生活もしたい。そしてもっと豊かに暮らしたいと考える。世界規模で見ても、発展途上国は先進国のような経済成長を目指し多くの投資を呼びこもうとしている。「自分たちはさっさと豊かさを享受しておいて、自分たちにはエコだとか我慢を強いるのはおかしいではないか。」というのがＣＯＰなどでなかなか話がまとまらない理由でもある。日本国内でも、豊かさを享受し、高度成長を味わった高齢者が、若者に対して節約を説き田舎暮らしを推奨するのはどうなのか。世代間の矛盾というのも大いにあると思う。80 億人の食糧を確保していくには、経済成長をしないといけないし、それだけの穀物を作るには二酸化炭素は多い方が生産性が上がる。人間とは矛盾の生き物であることも頭に入れておきたい。

ＭＦＲでは古民家の下を流れる小川で小水力発電を行う考えもある。毎分、風呂おけ 1 杯分くらいの水の流れがあれば十分発電できる。流れに沿って何台も発電装置を並べれば発電量は増やせる。太陽光発電は太陽が出ていなければダメだし、風力発電は風次第の上、風切り音が気になる。それらに比べ 24 時間発電できる水力発電は雨が多い日本に適しているのでエコな地域にするためにいずれ実現したい。ＭＦＣの女性 3 人ほどから「レイライン農園の一部で作物を育てたい。」という申し出があった。坂さんは良い土を運んで提供するが、こうした方々が徐々に増えそうだ。彼女らはコロナ禍の時にＭＦＣでテレワークをし、都会の生活より自然豊かな田舎の暮らしに目覚めた。しかも会社勤めが終わり、何かしたいと思う人も増えてきた。そうした人達が好きな時間に働き、ちょっとした収入を得られる場の提供を積極的に進められるといいと思う。

「ロサンゼルスのニューポートビーチに住んでいた時に、サンフランシスコ近くのソノマにあるシーランチというゴルフ場を 2 度ほど訪れた。立派な紳士がフロントやショップやレストランで働いていた。聞くとみんなリタイヤーしたそこのメンバーの方々だった。“自分のゴルフ場を支え、しかもお小遣いを稼ぐのは良いよね”と言っていた。」と坂さんは高齢になっても元気な人はＢＷＣやＭＦＲで働く仕組みを作りたいと思っている。

デズモンド・ミュアヘッド氏は坂さんに「ゴルフ場は周囲の 200 軒の住民がメンバーになっておれば経営は安泰だ。」と住宅と一体型の開発を勧めていた。坂さんは節目節目にその言葉を肝に銘じて行動してきた。ＭＦＣには 140 軒が建ち、あと 20 軒分の土地が売れて建築待ちしているから最終的には 160 軒となる。しかしミュアヘッド氏のいう 200 軒には 40 軒足りない。それもあってＭＦＲにトレーラーハウスなどを作っているのも坂さんの新たな投資の理由の一つだ。

「ＢＷＣのメンバー、ＭＦＣに家を持った人達に対してはＢＷＣの経営を順調に進められるようにする責任を感じている。そして古民家を中心に皆さんが喜んでくれ、外の世界にも開かれた場所にしてＭＦが今後も新たな文化を育むようにすることが 80 歳になっていつ天国に呼ばれるかわからない僕のレガシー（大いなる伝承）の気持ちだ。」と坂さんは思いのたけを語っている。

また坂さんは、古民家のそばにパッティンググリーンと小川を越えるジュニア優先の 200

ヤード近く飛ばせる練習場も造ろうとしている。ＢＷＣには米カリフォルニア州サンディエゴで毎年夏に開催される世界ジュニア選手権で優勝したり、上位入賞する子どもたちが多く、市原市もジュニアゴルフのメッカとして応援する構えである。だからジュニアゴルファー育成の場所にもなる。既に米フロリダ州の多くのスポーツ選手を輩出しているＩＭＧという学校に根本悠誠君が留学して活躍していることは書いたが、ＭＦＣに家を持つ南さん、佐藤さん、須藤さん、岸田さんの子弟もジュニアゴルファーとして成長著しい。ニュージーランドにゴルフ留学している女子もいる。坂さんは「プロゴルファーを養成するというより、ＭＦで育ち、留学して世界を見る眼を開き、20 年後にはＢＷＣをはじめＭＦを背負って立つ人を一人でも多くしたい。」と百年の計を考えていると言う。

また、近くの長谷川ライディングファームとタイアップして野山を馬に乗っていくトレッキングコースや小湊鉄道の高滝駅まで散策しながら往復する山道も構想している。子どもたちに自然や馬などとの触れ合いでのびのびと健康に育って欲しいと願っているのだ。

「私が米国に住んでいた時に学んだのは、人家の少ない地域にコミュニティーを作り、その中にゴルフ場を造るのは潤いのある街作りのため、ということだった。ＭＦＲを潤いのある場所にしたい。ＢＷＣのメンバーが集える場、さらに地元の方々や行楽客と出会いの場。そしてＭＦにはこんなにも楽しいゴルフ場があるという誘いの機会が生まれたら最高だと考えた。だからレストランも宿泊施設も誰もが気軽に利用できることをイメージし、建設した。ＭＦＣの理事会やＢＷＣメンバー専用の部屋があっても良いかもしれない。料理は地元の方やインドやフィリピンの料理人経験のある青年が作ることもあり得る。房総半島は食材の宝庫だ。遠来からコストをかけて運ぶのでなく、内房、外房の旬の魚、野菜、牛肉、豚肉、果物を美味しく食べられるレストランを思い描いている。」

坂さんの思うＭＦの未来は、自分で考え、覚悟を決めて行動に移す前向な人々の関与、そして次世代のアイディアや実行にかかっている。

この 11 本目の原稿が最終稿です。“楽しみに読んでいるよ”との声に支えられて書き続けることができました。ありがとうございます。また原稿のチェックをして下さった高滝リンクスの木内充社長、原稿に写真をレイアウトするなど編集に関わってくれたＢＷＣスタッフ原田綾女さん、それに内容の補足のためのインタビューを受けてくれた坂征郎さんに深く感謝します。2024 年春には加筆修正して出版したいと考えておりますので応援のほどよろしくお願いします。

（中島健一郎）